

前ページからの続き>>

脳梗塞で一時は助からない、「植物状態」「家には帰れません」と入院先で医師に告げられましたが、病院の退院調整看護師が「帰れますよ・・・」と教えてくださいました。その一言で心が決まり、高齢の父とともに病院で経鼻栄養の管理、おむつ交換、痰吸引などを1週間で覚えました。手探りで在宅介護が始まりましたが、高熱、痙攣、呼吸困難など目が離せない緊張の毎日・・・介護チームの方々が支え導いてくれました。

母と遠足 お花見へ

いつも我が家には笑顔と笑い声が溢れていました。ケアマネ・訪問看護師・ヘルパー・訪問入浴・訪問リハビリ・往診などみなさんを家族だと思って接してきました。母もスタッフの方からの声かけで表情が出てきました。

ある夜、母の隣で手をつないで寝ていると、声は出ないのですが母が一生懸命お口をパクパクと私の名前を呼んでいました。そんな小さな奇跡はたくさん起きたのです。リハビリも導入されベッドに座れるようになり、じゃあ、次はお花見へ行こう!という夢を目標にしました。在宅酸素と吸引が必要な寝たきりの母ですが、その翌年の春には大勢のスタッフと共にお花見が実現しました。その翌年も、山あり谷ありをみんなで乗り越えながら2年続けてお花見が実現しました。

父が天国へ そして、母も天国へ

高齢にも関わらず、毎日母の薬を作り、注入食を入れ、痰吸引、洗物などとても協力的な父が突然肺炎で体調が悪化。人には迷惑をかけたくないという父でしたが脳梗塞と肺炎による誤嚥で、残される家族を心配しながら誰にも迷惑をかけることなく逝ってしまいました。その夜、リハビリのスタッフ達が車椅子を持ってきて母を父の隣に連れて行ってくれました・・・私は、嬉しさと感動で胸がいっぱいになりました。

母は父をしっかり見送ると、娘にこれ以上負担をかけたらいけないと思ってか、父の後を追うように逝ってしまいました。

Mさんからのメッセージ

両親が安らかに天国へ旅立つのを側で、見守り見とけられたこと、それは掛け替えのない瞬間であり私たち家族と在宅介護チームの愛の結果(かたち)だと思いました。

母を介護してきた約5年間は私の人生の中で最も幸せな時でした。本当にいろいろとドラマチックなことが起こり語りつくせませんが、私たち家族のような辛く厳しい状況の中であっても、沢山の愛で幸せを感じられる、そんな家族やご本人たちがひとりでも多くなるような地域づくりのお手伝いをしなければと思っております。

命には「身体の命」と「心の命」があるように思います。身体の命には有限性がありますが、大切な人が亡くなったあ

と、その人を思い物語ることで心の命はつながり、今生きるこの意味が深まるのだとTさんとMさんのお話をうかがって感じました。

この地域で最期を迎えることが出来て良かったとご本人やご家族が思うことができるように私たちは力を尽くしていきたいと思いました。

(小林 舞見)

Tさんは、7月9日にホスピスで、娘さんの元に旅立たれました。きっと今は、娘さんとの時間を楽しんでおられることでしょう。



ご長寿さん特集 第1回

おおみや葵の郷入所中のFさん(113歳)

「ご長寿さん特集」記念すべき第一回目は、昨年ついに京都府内最高齢になられたFさんのところに取材に行ってきました。



Fさんは1901年(明治34年)、京都府南部の農家の家に生まれました。戦前戦後の厳しい時代を生き抜いて、6人の子供を育て上げ、3年前まで上京区内で独居生活を送っておられましたが、転倒骨折を機におおみや葵の郷へ入所。「苦労はよくした、知らん間に113歳になってたわ」とFさん。相棒は110歳のお誕生日プレゼントにももらったパンダのぬいぐるみ「きよし」さんです。ちなみに何故「きよし」さんなのかは誰も知りません・・・。

—好きな食べ物は?

羊かん、それからぐじ。嫌いなものは特になし。まあ美味しい物が好きやな。

—息子さんにもインタビューしてみました。

貧乏もしたし、たくさん苦労もあったと思いますが、母が愚痴をこぼしたり声を荒げたりした記憶はありません。昔の人ですから自分を律するというか、いつも穏やかで明るい人でした。自分の母親ながら、物の見方や立ち居振る舞いなど賢い人だと思っています。

お昼寝時の突撃インタビューでしたが、ほんわかしたFさんと優しい息子さんのお話を伺って、職員さんにも大人気のFさんの秘密が少し分かった気がしました。次回はあなたのところへ伺います!